

# 日本英学史学会 中国・四国支部

## ニューズレター

No.73

*Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter*

### 開拓と開発と

一年頭のご挨拶

竹中龍範

皆さま、新年明けましておめでとうございます。本年も支部活動の活性化に向けていっそうのご支援をお願い申し上げます。

本年度第2回の支部例会は、去る12月8日(土)、愛媛県今治市の今治明德高等学校矢田分校を会場に開催されました。入会なお日の浅い同校の藤本文昭先生のお世話になり、小雪が舞うかと思えばかりの寒い日でしたが、藤本先生と、これも入会されたばかりの菅紀子先生の研究発表2本を伺いました。その詳細はいつものようにニューズレター本号に報告されておりますが、いずれもご当地ネタと言うべき内容のご発表で、これは各年度第2回の研究例会の特徴となっております。もちろん、これを12月例会での発表に毎回求めるものではありませんが、広島支部が中国・四国支部へとその版図を拡大した今、地方英学史の掘り起こしという作業を支部活動の一つに位置づけることができるかと考えております。この視点に立つと、今回の今治例会は、中国・四国支部の領域には含まれながらもこれまで会員がおらず、例会開催もなかった愛媛県を新たに開拓したという成果につながり、一方で今治英学史の掘り起こしという開発につながったということで、会員の皆さまによる支部活動活性化に向けてのご支援の賜と感謝いたします。

言うまでもなく、愛媛県の英学史が今治地域に限られることはなく、松山にも発掘の余地は充分に残されておりますし、宇和島は蘭学時代からの奥深い洋学の伝統を持っております。ただ、このような地方英学史はやはり地元で研究者がいてこそ効率的に進められるもので——全国にわたって地方英学史を発掘した池田哲郎氏の『日本英学風土記』(1979)は例外的なものと言えましょう——、その開拓、すなわち、各地の史談会や地方史研究会の会員中から英学史、あるいはさらに広く蘭学史・洋学史に関心をお持ちの方々と連携を進めるということが考えられてもよいのではないのでしょうか。かつて愛媛大学には日本教育史をご専門とされる影山昇先生がおられ、その研究分野に英学史・洋学史を含んでおられましたが、教育史の研究者中から同学の士を発掘することも可能かと考えます。

また、そのように、幅広い領域から同志を糾合することによって、これまででない英学史研究の視点、アプローチを開発し、すでに発掘済みの資・史料に新たな分析の手が加えられて、従来の研究の流れからは産み出されることのなかった研究成果が公にされることも期待されるところです。

開拓と開発とがどのように異なるのかと詰問されると答に窮するところですが、これは国語辞典に拠っていたくとして、年頭に当たり、支部活動の活性化についてこのように考えてみました。理事会、あるいは事務局に対して、皆さまからのご意見をお寄せいただければ幸いです。(香川大学/日本英学史学会中国・四国支部支部長)

## 平成24年度 第2回 (通算67回) 研究例会 報告



2012年12月8日(土)、今治明德高等学校矢田分校(愛媛県今治市)において、平成24年度第2回(通算第67回)研究例会が開催されました。地元の方々を含む17名の参加がありました。

開催にあたり、今治明德高等学校矢田分校 藤本文昭先生には格別のご配慮を賜りました。心より篤くお礼申し上げます。

### プログラム

日 時： 2012年12月8日(土) 13時 受付開始

会 場： 今治明德高等学校 矢田分校 2階ホール

〒794-0081 今治市阿方甲 287 Tel.0898-25-3787 (代) Fax.0898-25-6388

開会行事 (14:00~14:05) 支部長挨拶 竹中龍範(香川大学)

研究発表(1) (14:05~15:15) 司会 保坂芳男(拓殖大学)

太平洋戦争下の愛媛県今治地域での英語教育 藤本文昭(今治明德高等学校矢田分校)

研究発表(2) (15:30~16:40) 司会 馬本勉(県立広島大学)

今治出身の重見周吉と『日本少年』 菅紀子(松山大学 非常勤講師)

閉会行事 (16:45~17:00) 副支部長挨拶 松岡博信(安田女子大学)  
写真撮影

忘年懇親会 (18:30~20:30) 信州そば 久保田にて

## 研究発表(1)

## 太平洋戦争下の愛媛県今治地域での英語教育

藤本 文昭 (今治明德高等学校矢田分校)

## 【発表の概要】

本研究の目的は英語排斥論が席卷していた太平洋戦争下で、地方都市今治やその周辺において英語教育がいかなる状態であったか、その実態を資料や証言から考察することにあった。女学校では各校によって多少対応の違いはあるものの、文部省の指示で随意科目に移行されてから、英語教育は事実上無くなった。その一方で男子校であった工業学校や中学校では英語教育が施されていた。特に英語を入試科目に課していた軍関係の上級学校受験者には、課外授業まで行われていたことが判明した。これらの事実から戦時下においても今治やその周辺の中学校では英語教育が脈々と生きていたことが確認できた。またフロアから、全国にまで視野を広げると外国語科目随意化後も英語教育を続けていた女学校があったとの指摘をうけた。愛媛県全体を見渡すと、そのような例が存在するかもしれない。この事実確認を今後の課題としておきたい。



## 【参加者の感想】

◆太平洋戦争中の英語教育、特に高女のそれは不明なところが多く、質疑応答でもお願いしましたように、調査の範囲を県域全体に広げて頂ければと思います。その際にこの時代の全国的動向を踏まえ、愛媛県に特殊な事例が見られるのかどうかなどの分析を加えられることをお忘れなく。<Dragon>

◆資料の渉猟と生き証人へのインタビューを通し、戦時下の今治の学校の英語教育をヴィヴィッドに再現した発表に感銘しました。<Emma>

◆緻密な聞き取り調査に感銘を受けました。戦時下においても気骨を持って英語教育に携わった先人の教育に対する情熱がこのように掘り起こされ、後世に伝えられることこそ、英学史研究の素晴らしさだと思います。<Mappy>

◆第二次世界大戦下の愛媛県今治地域の英語教育は全国の他の地域の英語教育との類似性が感じられますが、藤本先生が地道に史料・体験者からの証言を収集され今治地域の英語教育の実態を明らかにして下さったことは貴重であり、とても勉強になりました。今後、戦時下から「時空」を拡大・拡張され、今治の英語教育の「蓄積」を明らかにして頂きたいです。<もみじまんじゅう>

◆愛媛県今治地域での英語教育の実態に迫るべく、体験者の証言を綿密に集められており、興味深く拝聴しました。戦前、戦中の教育を受けた人は高齢で少なくなっており、特に英語教育を受けられた人はほんの一握りに過ぎなかつたので余計に関係者を探

すことが大変だったと思われまふ。また、とても難しいことですが、クラウンの教科書は見せていただきましたが、当時の教科書等の教材や指導資料がもっとあればさらに実態の把握が進むのではと感じました。英語教育には直接関係なかったのですが、焼夷弾の実物は初めて見て触ることができて、自分の生まれた頃にはこんな物で岡山市が昭和20年の6月に焼け野原になったのかと改めて感じました。

&lt;JH4DGW&gt;

◆現地(今治)でお聞きする「太平洋戦争下の愛媛県今治地域での英語教育」はとても臨場感あふれるご発表でした。たくさんの写真、データ、そして教科書等の実物を手にしながら、藤本先生の説得力あるプレゼンにすっかり同時にタイムスリップしてしまいました。藤本先生、お忙しい中、本当にありがとうございました。<Rainbow>

◆藤本先生の研究手法はフィールドワークのようですね。経験・体験談の分析・紹介は、書物での情報とは違い、生き生きと情景が浮かび大変面白かったです。戦時中の旧制中学の教員が高い志を持って英語の授業に熱心に取り組んでいたことに感銘を受けました。<YH>

◆戦時下における英語教育の実態を興味深く拝聴出来ました。S14年7月1日発行の*The New Kings Crown Readers*を用いた当時の旧制中学の教育内容には敬服する。先達の教育者達の情熱に感服です。

&lt;山田宗八&gt;

## 研究発表(2)

## 今治出身の重見周吉と『日本少年』

菅 紀子 (松山大学 非常勤講師)

## 【発表の概要】

重見は夏目漱石のライバルとされるも漱石研究年表にさえ「不詳」とされる。本発表ではまず、倫敦漱石第5下宿の史跡認定を機に本書の翻訳を決意した経緯を紹介し、重見と同郷という以外に本研究に取り組む必然性を確認させていただいた。次に2003年に翻訳研究書出版までに収集した資料に2012年出版した少年少女版との間に得た新資料を加え、両者をライバルとする根拠、重見の経歴と人物像、今治教会にまつわる諸事、今治の地域的特性、そして『日本少年』に登場する具体的事物を今治紀行として紹介した。

夏目の人生行路に与えた影響を別枠としても、『日本少年』は単独で明治初期に英語で北米大陸に異文化を紹介した快著であり、重見周吉は異文化交流の先駆者であったといえる。



## 【参加者の感想】

◆重見周吉の足跡発見のお話を伺いましたが、興味を感じながらもこの御発表を論文として纏めるとなると何を基点とし、どのように展開するかを構想されないと難しいのではないかと思います。ぜひ紀要に投稿の方向でお考えください。御発表の最後に触れられたように、日本人の英文著作史の観点から分析する等のアプローチも考えられようかと思います。<Dragon>

◆漱石の運命を変えた重見周吉についての考証的研究の醍醐味を満喫いたしました。<Emma>

◆菅先生のお話には多くの疑問が湧き、逆にそれが興味をかきたてられた。重見周吉の学歴詐称がユニークで面白い。重見も平民であったのに、漱石が平民であったから学習院の採用において不利であったという恒松郁生館長の主張は矛盾しているように思われる。かつ医師免許を重見が持っていたとのことであるが、アメリカの大学の医学部を卒業しても日本の医師免許は取得できず、その辺が面白い。重見の一生を漱石との対比で論じることの視点が大変興味深い。明治の文豪漱石を結果的に生んだのは、確かに重見周吉だと思う。<Mappy>

◆重見周吉という人物、そして彼の著作 *A Japanese Boy* (『日本少年』) の存在を始めて知りました。今治がこんなに早い時期に日本文化を英語で発信した逸材を生んだことは郷土の誇りと思います。学習院への採用において重見周吉が夏目漱石を打ち負かしたことは快挙と言えますが、今後、重見自身

の英語学習・修業歴を明らかにされ紹介していただければ「英学史」の風情がもっと漂うと感じました。よろしく願いいたします。<もみじまんじゅう>

◆重見周吉という人は今回の発表で初めて知りました。一番興味深かったのはかの文豪夏目漱石との関係でした。今から150年以上も前に単身アメリカに渡り、大学教育まで受けられた英語力はどのようにしてつけたのかとても興味をそそられました。菅先生は『日本少年』をはじめ、多くの資料を当たられて彼の生涯を研究されていることに感銘を受けると共に、先生の著書を拝読したいと思いました。また、帰宅して早速『A Japanese Boy』を注文しました。

<JH4DGW>

◆夏目漱石のライバル、重見周吉が日本のそれも故郷今治での生活を英語で出版した、とお聞きしてとても感動しました。この本は英語教育史だけでなく郷土史の観点からも貴重な資料だと思います。夏目漱石の運命を変えた重見はどのような英語学習を行っていたのか、とても興味深いところです。また、お伺いできればと思います。ご著書も送っていただいたのでじっくり拝読させていただきます。

<Rainbow>

◆地元の研究者らしい丁寧で細かい調査・研究に感銘を受けました。<YH>

◆重見周吉と夏目漱石との出会いと運命の糸をたぐりよせられた調査研究、実にすばらしい内容でした。今治における研究発表、新鮮でした。<山田宗八>

## 研究例会全体について

◆今治での初の研究例会にふさわしい、大変に充実した発表でした。藤本先生と菅先生のますますのご活躍を祈念しております。〈Emma〉

◆高等学校で学会の開催を了承されたことに敬意を表したいと思います。これは藤本文昭先生の熱意・ご人徳の賜と思えました。研究例会はいつもの通り、内容的にも充実した、そして円滑な運営、事務局ならびに関係者の皆様の企画力・ご尽力のお陰と感じ入りました。ありがとうございました。

〈もみじまんじゅう〉

◆発表者の先生の日頃のご研究の成果をお聞きし、フロアの方の忌憚のないご意見等、いろいろ参考に

なりました。お二人の発表から、明治期と昭和期の違いはあるものの、周囲の困難な状況にもめげず、英語学習に取り組んだ日本人の姿勢をよく理解できたような気がしました。

また、いつもながら懇親会は研究発表と共にリラックスした雰囲気の中で示唆を受けることが多く、毎回楽しみにしています。

お世話いただいた馬本先生をはじめ事務局の先生、会場設定・研究発表・懇親会とお世話をくださった藤本先生、本当にありがとうございました。

〈JH4DGW〉

## 中国・四国支部ニュース

### 〉〉 平成 24 年度第 2 回理事会

2012年12月8日(土)、今治例会に先立って開催された理事会において、今年度の活動報告および平成25年度活動計画について協議しました(出席者5名)。

当日の協議とその後の調整の結果、来年度の支部総会ならびに第1回研究例会は2013年5月25日(土)に広島地区にて、第2回は12月14日(土)に山口市にて、それぞれ開催することとなりました。

また新年度の役員について協議し、田村一郎先生のご逝去によって2名となった副支部長を3名の体制に戻すこと、それに伴い役員に新しいメンバーを加えること、理事・幹事の事務担当を明確にすること、などを申し合わせました。

### 〉〉 『英學史論叢』 第 16 号原稿募集

ニューズレターNo.72でお知らせしました通り、中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第16号(2013年5月発行予定)の原稿を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、ニューズレターNo.72、および『英學史論叢』15号に掲載の「執筆要領」「標準書式」に従ってください。

・原稿提出の締切は、**2013年2月20日(水)**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノートの投稿は正副計3部、英学史随想・時評・書評の原稿は1部お送りください。

## 英学史学会全国ニュース

### 〉〉 『英学史研究』 第 45 号

2012年10月1日発行。掲載論考は次の通り。

「本田増次郎とキリスト教児童文学：訳書『黒馬物語 一名驪語』の持つ意味」(長谷川勝政)

「イザベラ・バードの *Unbeaten Tracks in Japan* の4種の改訂版の意義」(高畑美代子)

「日英修好通商条約第21条をめぐって」(楠家重敏)

### 〉〉 「日本英学史学会報」 No.129

2013年1月1日発行。内容は、以下の記事など。

・50回目の全国大会(会長 北垣宗治)  
・洋学史(江戸) 散歩(5)：馬場佐十郎(杉並区)  
(堀 孝彦)

・日本野球事始(赤石恵一)

・《本の紹介》平川祐弘『内と外からの夏目漱石』  
(大前義幸)

・《追悼》西岡先生の眼差し(塩崎 智)  
西岡淑雄先生の思い出(大西俊男)

・第49回全国大会(和歌山大会)を振り返って  
(江利川春雄)

・《支部活動報告》ほか

※中国・四国支部の活動として、今治研究例会、ニューズレター (No.71, 72)、ホームページについて報告されています。

※閲覧希望の方は、事務局までご連絡ください。

※日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です(入会金2,000円、年会費7,000円)。

## 平成25年度第1回(通算第68回)研究例会発表者募集

平成25年度第1回(通算68回)研究例会を、2013年5月25日(土)に安田女子大学(広島市安佐南区)で開催の予定です。研究発表(持ち時間は質疑応答を含めて60分程度\*)を希望する会員は、(1)発表題目、(2)発表者氏名(所属)、(3)発表概要(200字程度)、(4)使用予定機器、以上4点について明記の上、事務局までお申込みください。

申し込み先 ・メール eigaku@tom.edisc.jp  
・ファックス 0824-74-1724 (馬本研究室直通)  
・郵送 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562 県立広島大学 馬本研究室

申し込み受付期間: 2013年2月15日(金)～3月15日(金)

\* 申込者多数の場合は、時間調整を行う場合がありますので、ご了承ください。

### 英学史情報ひろば

◇藤本文昭『真珠湾攻撃秘話 赤土の島: 日本軍パイロットを助けた日系二世』創風社出版、2012年(1,260円)

◇重見周吉(菅紀子訳)『少年少女版 日本少年』創風社出版、2012年(1,260円)

◇田村道美「カッセル国民文庫の書誌的研究(4): アメリカ版カッセル国民文庫第1期・第2期」『香川大学教育学部研究報告 第I部』138, pp.35-50.

◇大島明秀『熊本洋学校(1871-1876)旧蔵書の書誌と伝来』花書院、2012年(4,000円)

◇第147～149回「広島ラフカディオ・ハーンの会」ニュース(2012年11月～2013年1月)

\* \* \*

### 第150回「広島ラフカディオ・ハーンの会」

「広島ラフカディオ・ハーンの会」(主宰 風呂鞆)は2000年7月に設立され、毎月例会を行ってきました。来たる2月16日(土)には150回目を迎えます。第150回を記念し、東京在住の丹沢栄一氏をお招きして講演会を開催します(参加費無料)。ご関心のある方は多数、ご参加ください。

日時 平成25年2月16日(土) 14時～16時  
場所 比治山大学(広島市東区牛田新町4-1-1) 10号館4階 10409教室(予定)

講師 丹沢栄一氏(八雲会会員)

演題 「小泉八雲に導かれて: ある八雲愛好家の軌跡」(ヒューズ書簡, 本田増次郎, 外山正一, モース書簡, L.L.Janes, 小泉一雄と八雲高女などに言及される予定)

終了後には懇親会を予定(会費5～6千円)  
連絡先 鉄森 令子(携帯電話) 090-6434-1382  
(メールアドレス) reiko-t@zav.att.ne.jp

\* \* \*

**広島英学史の周辺(39)** 初めての今治例会はとても実り豊かな会となりました。地域の英学史・英語教育史を追い続ける地元研究者との直接対話は実に有意義でした。ご発表くださった藤本先生、菅先生に心よりお礼申し上げます。印象深いお二人の発表の中から、特に気になった箇所をメモしておきたいと思います。一つは「黒板に書く字も整然とし、ノートに取るとそのまま参考書になった」(藤本先生発表資料)。もう一つは「実は此地にも昨年まで中学校があつて、英語科もやつて居たんですが、経費の都合で廃校してしまつた」(菅先生資料)。前者からは当時の英語授業の一端が、後者からは周吉が履歴書に記した「幻の中学」解明への糸口が、それぞれ目に浮かんでくるようです。▼1月はあつという間に過ぎ去り、旧正月が近づいています。暦の上では間もなく春ですが、まだまだ厳しい寒さが続きます。どうか皆様ご自愛ください。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No. 73

2013年1月31日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中龍範)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話 & FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.73 January 31, 2013